



学校体育とジェンダー・ポリシークス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井谷, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/16238

第1回講演

学校体育とジェンダー・ポリテクス

井谷 恵子

最初に少し自己紹介をさせていただいて、用意してきた資料を元に、皆さんにも参加いただきながら進めていきたいと思えます。私は京都教育大に奉職しまして、22、3年になりますが、その前は高校の教師をやっていた時代もありまして、「何て不平等な世界だろう」という憤りをもって大学の方に移ったというような経緯があります。具体的に言うと、どうして女性の教員はこんなに少ないのだろうか、その扱いについても不満だらけでした。それで大学教員の職を得て、早速それをやらなくては、この立場は大いに利用しなければと思って、それで熊安さんも一緒に「日本スポーツとジェンダー学会」というのを立ち上げて今に至っています。

今日はずいぶん時間が長いので、体育だけというよりもその周辺のことも含めてお話ししたり、皆さんのご意見も伺えたらなというものあって、いろいろなものを用意してきました。様々な側面から話ができたかと思っています。ウォーミングアップとして、つい最近、東京2020オリンピック・パラリンピックまで1,000日とか言っていましたけれども、そういうなかで、いったい男女平等というところから何が見えるのかというようなことを最初に申し上げたいと思えます。

そのあと、女性のスポーツ離れ、主に中学生・高校生の女性がスポーツから離れていくという現象がありますが、それをどう考えていくか、授業の経験はどうなのか考えたいと思えます。

次に、そういうことも含めて体育カリキュラム、平等とされているけれど本当にそうなのかということです。木村涼子さんが主張されている、学校というのは実は不平等を再生産しているのではないかという観点から考えてみましょう。

もう一つは性的マイノリティ、これも最近になってやっと可視化されたと言いますか、学校の中で語られ始めたばかりです。それと体育との関係はどうなのか。

さらに、学校体育を巡る思惑ということで、最近はブラック部活とか、オリンピックの準備のために非常に加熱しているところがありますので、そのところを、ジェンダー視点から、一緒に考えていただけたらと思っています。

体育・スポーツは男性の牙城を解体したか

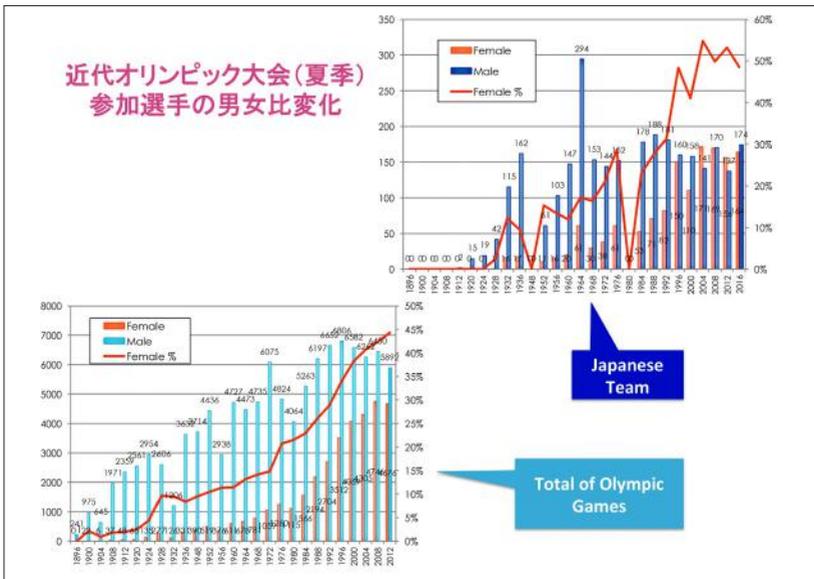
体育・スポーツに関わるフィールドは幅広いです。競技スポーツの世界では、今まで男性を中心に進められてきて、女性というのはあとから参加したアスリートという扱いでした。ただ、この何十年かの間に、あらゆるスポーツに女性が参加するようになっていきます。それを表面的に見ると、非常に男女平等が先進的に進められた分野ではないかというふうに思われるところがあります。そう信じている人たちもたくさんいるということです。こんなに女性が運動、スポーツをやっているのに何か文句があるのか、むしろ進んで先進的にやってきたところではないかというようなことを言われることがあります。

それから、学校教育での「男女平等カリキュラム」。これは本当に進んできたのか。それからスポーツクラブ。これは地域スポーツの問題ですけども、スポーツクラブやフィットネスクラブのようなどころへ行ったら女性の方が多いじゃないか、女性の方がよっぽどスポーツを楽しんでいるじゃないかというような言い方をされる場合もよくあります。

男女平等カリキュラムに関して、中学校では現行の平成20年改訂のものですが、男子女子の別なくダンスと武道を学習できる、共修になったとい

うことです。果たしてその実態と背景はどうか。順に具体的な事例を見ていきましょう。

このスライドは、今回のオリンピックに関わって女性アスリートの活躍のスナップをざっと並べてみたものです。どれも、これまで女性が参加しなかった、あるいはマイノリティとしてしか参加できなかったところに女性が入っていくようになりました。スキーのジャンプ、レスリング、柔道。こういったスポーツの、トップアスリートの世界だけを見てもいろいろなことが語れますね。つまり、これだけ活躍しているように見えますが、という意味です。ジェンダー視点からの問題は山ほどあります。今日はそこまで触れると教育から外れてしまいますね。



アスリートの活躍に関して、オリンピックの男女別選手数と男女割合です。女性の割合は右肩上がり、順調に女性の参加者が増えているということになります。一方、日本の選手団の中での女性選手の数、あるいは選手の占める割合を示したのを見ますと、最近では50%を超えている時があ

ります。男性より女性の方が多。ただ、これを「本当に平等だ」と読むかどうかですね。端的に言うと、最近では国家的なメダル競争の様相なのでメダルに近い選手を送り出すということです。幸か不幸か、オリンピックは男女別なので、男性であっても女性であってもメダルが取れたらいいと、メダルに近い人をどんどん送り出していくという結果、このように女性選手の割合は増えているということです。

ただし、中身といいますか、質の面といいますか、質というより、たとえばリーダーの役割とか、役員も含めて、指導者も含めて見ますと、数でも本当に大きな差がありますし、その扱われ方については、多くの問題が残されているというところでは。

考えてみよう

今までのところは、学校はどうなのでしょうということを考えていただくためのウォーミングアップです。今から、短時間ですがお示しするようなテーマについて考えていただきたいと思います。お手元に、グラフのたくさん入った資料があるかと思いますが。現在、毎年文部科学省が小学生、中学生の体力テストを全国規模でやるようになっていますが、これは平成25年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」のデータです。それまで、かなり無関心に近かったのですが、男女別でいろいろなデータ、運動習慣であるとか、そういうものも含めて提示されるようになってきました。過去の小学校の5年生のときとか、小学校の低学年のときはどうだったかという、そういうことも含めて、調査された結果です。聞いているばかりというのはちょっと大変なので、2人か3人ぐらいで、ここから何が見えるかというのを話し合ってくださいと思っています。

(グループでの意見交換とグループごとの意見紹介)

ありがとうございました。一つ一つお答えを示すという意図ではないのですが、基本的に共通理解だけは持っておきたいと思っています。一つ

は体育、スポーツ、運動、それから今回は出ていませんけれども身体活動、これどういう違いがあるのかということところです。今も一般的には割合混在して使われている部分があります。

そもそも体育というのは、今でも国民体育大会とか、学校の運動会を体育大会とかと言ったりするように、運動、身体活動を伴うようなものをすべて「体育」と呼んできた歴史があります。ですので、今もかなりの年配の方なんかは、「運動する」という代わりに「体育をする」というような使い方をします。現在はこの体育というのは教育の概念として使っています。ただ、習慣的に国民体育大会のように残っているものもあります。

スポーツですけれども、これも概念が非常に広くて、もともとのスポーツの語源からいうと、自分を解放するとか、必ずしも皆さんが思い浮かべられるような競争的・身体的なものばかりではない。世界的には身体だけではなくて、チェスなどマインドスポーツと言われるようなものまで含めてスポーツと考える文化があります。国内でも、今はウォーキングやハイキングであるとか、そういうものも含めてスポーツと呼ぶ流れです。

ただし、その中でも近代スポーツというものに注意する必要があります。これは競技スポーツ、競争を主眼としたスポーツです。これが学校の中では主流として扱われており、学校でスポーツという場合には、近代スポーツ、競争的なスポーツを主に指していると考えていただきたいと思います。

それに対して、もっと健康のためのエクササイズのようなイメージで「運動」を使ったり、もっと広く考えますと、「人間の運動」となると、歩いたり、よじ登ったり、掃除したり、ドアを開けても、すべて運動ということになるわけです。こういった人が生活の中で体を動かすことを「身体活動」、一方、意図的に行うものを運動と呼び分けているように思います。必ずしも定義が一定しているわけではないのですが、大雑把にはそういう使い分けをしているということです。

この調査は、少し誘導的な感じを受けるものもあります。ただ、この質問項目の方を見ますと、ある程度定義しながら質問しています。

全般として、これで読み取っていただけるもの、疑問を持っていただく

ものもたくさんあると思うのですが、ジェンダー、男女ということで考えてみましょう。まず、学校の体育をやればやるほど、つまり小学校で6年間やり、中学校で3年間やり、義務教育ではないのですが99%の子どもたちが高校に行くわけで、そこでまた体育が3年間必修、計12年間も必修の体育を行っているにもかかわらず、学年段階が上がるほど、女性の場合は離れていくという結果が見えてきます。つまり「体育って一体何なの。何を学ぶところなの？」ということだと思います。

体育の歴史の中で考える必要があるように思います。戦後、それまでの体錬的なもの、精神的、身体的なものを鍛え上げていくために体育というものが利用されてきたという歴史から、より生活の中で生かしていきける、そのスポーツとか、運動そのものを楽しむ、そういう教科として変化してきたという歴史があります。

それでも、技能であるとか、うまくするとか、しっかり運動をするということが、どうしても中心になってしまう現実がずっと引き続いてあるということです。どれだけ学習指導要領が変わっても、批判されても、やはり技能というものが中心になり、それと同時に人間形成という視点も、なかなか体育では外せない。まあ教育全般そういう傾向はありますが、なかでも体育は、生徒指導に近いような使われ方をしてしまうという部分があります。

そういったことが、特に最後の方の表で、どんな内容だったらもっとやりたいかという回答の男女差に現れているように思います。例えば、異なる価値のあるものやってみたいけれど、今の内容については不満だというようなこと。また、友達と一緒にやれる、あるいは、友達と一緒に学習を進めるといようなことが中心であれば、自分は体育の授業の中で、もっとその価値を見いだせたいし、楽しめたいというようなこともあります。つまり、体育というものが、一体何を目的にされているかということとの関連で見ていくということになると思います。

抽象的な言い方をしましたけれども、スライドの方で進めながら具体的に説明を加えていきたいと思います。すべて、皆さんから出していただいた疑問などに答えられていないかもしれませんが、これからの説明や議論

を通して、最終的に見えるものが増えればと思っています。

全国体力テスト

全国体力テストは、強力に推進された時代があります。体力主義の時代といって、昭和30～40年代です。私の年代の方だったら記憶にあるかと思いますが、スポーツバッジテスト、スポーツテストと言って、いい記録だったら賞がもらえるというような制度がありました。

その後、体力を重んじた体育の影響で、結局、体育嫌い、運動嫌い、スポーツ嫌いを多く生み出しました。その時代はどんなことをやっていたかと言いますと、私は、まさにその世代なので記憶が鮮明に残っています。小学校ですと、2限目と3限目の間に20分休みという長めの休み時間があります。その休み時間に、「全員グラウンドに出なさい」と指示が出ました。駆け足の音楽がかかって、それぞれのクラスなどで、列を組んで同じスピードでみんな走るのです。学習指導要領に総則というものがあるのですが、体育という教科以外に、学校教育全体を通じて、体力を高めるという目標があるのです。そういう、とにかく体力を高めることを重視した時代があります。

古い学校では、今も校庭の周りにサーキットトレーニングのコースが残っているかもしれません。例えば、ここでは腹筋、ここではタイヤを跳ぶ、ここではぶら下がる、そういうサーキットコースです。今はあまりサーキットという言い方はしませんが、古いタイプの体力づくりのコースが残っている学校があります。

その後、体育嫌いを生み出したことへの批判が高まって、制度的には反省をした格好になっています。その記憶がおありになる方ありますか。そういうことをやったなとか、ありませんか。そうですか、皆さんお若いので、ということですね。熊安さん、ありますか。

○熊安 業間体育とかで何かさせられたり、朝ちょっと早くとか。私自身が運動がわりと好きだったので、結構抵抗がなく、その時期は受け入れ

ていたんですけれども、でもみんな一斉に何か同じ達成度を測られるというのは、ちょっと嫌なものがありましたよね。体力主義の時代に、やっぱり私は小学校、中学校にいたので、持久走でも何の目的かわからないのに、みんなで同じ目的を設定されて延々走らされるというのが訳がわからなかったというのがあります。あとでこういう勉強をし始めてから、それがすごく疑問視されるべきことだったんだというのは気付くのですけれども、当時はあまりわかっていなかったです。

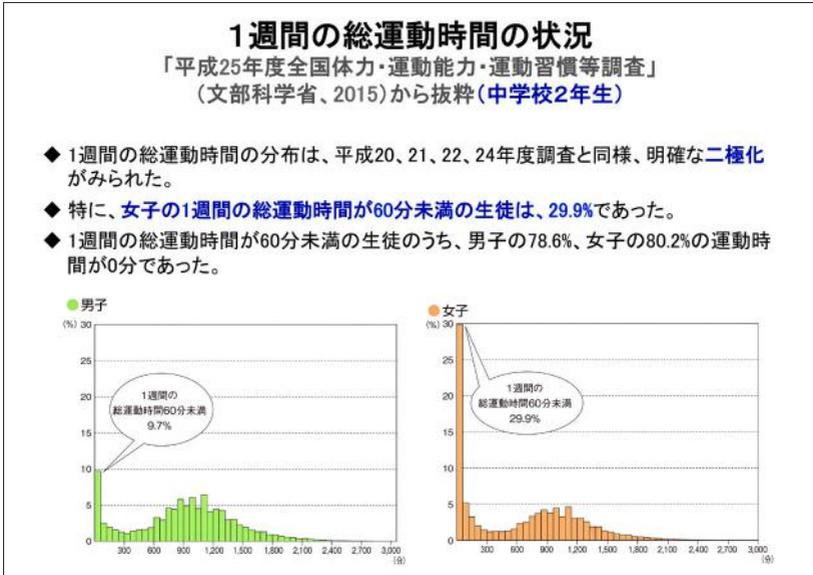
- 井谷 そうですね。一方向的に、「じゃあ、みんなで一緒に同じペースで走りましょう」というのは、さすがに影を潜めた感じはしますけれども、かたちを変えながら、休みの時間になったら、みんな教室に残らないで全部出ていきなさいという、そういう取り組みは、今また逆に始まっているというか、続いているように思います。

それはなぜかと言いますと、現在の体力テストというのは実は昔とはちょっと違うものになっています。2000年前後に、子どもの体力が再び問題になり、それをきっかけにして、子どもの体力を何とかしようと中教審の答申が出ているのです。それを受けて、今の全国体力テストというものを復活させて一斉にやるようになったということです。ただし、中身はさすがに昔と同じようなことをやろうということにはなっていません。基本的にもっと解決しなければならない、例えば子どもの自由な時間を保障しようとか、遊ぶ場所を保障しようとか、あるいは仲間。三つの間と書いて「三間(さんま)」、仲間、時間、空間です。そういうものが大事なのだということです。ただ、一方で、こういう体力テストの結果が、たとえば大阪のなかでも、どこの学校より高い低いとか、全国の水準よりもどうだとかというようなことが問題にされるような現象が出てきています。

「運動が苦手・運動しない女子」への注目

元に戻ります。この体力テスト、平成25年の結果で初めて女子が注目され

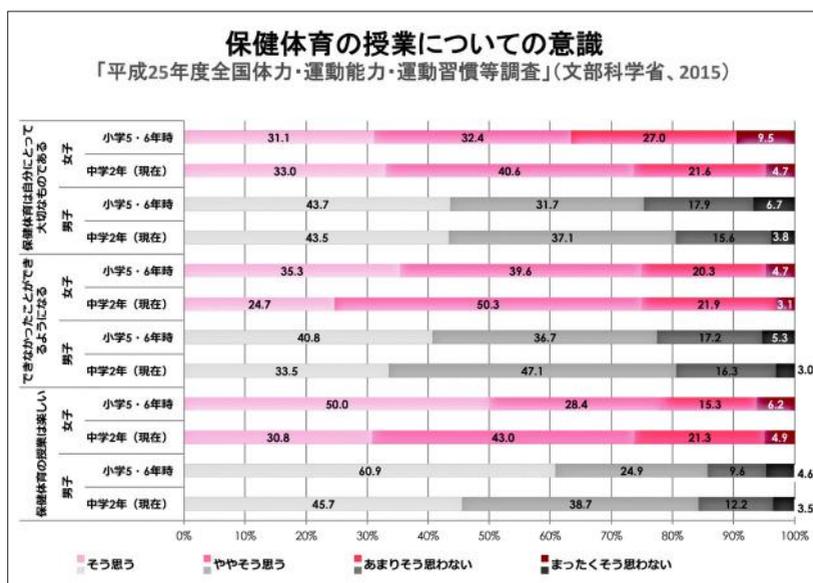
たという現象があります。それまで、男女差は当然とされていたと言いますか、相当な差はあったにもかかわらず、この時期に運動をしない女子という現象に注目が集まり、報告書の中でもそこに視点を当てた章があります。ただ、その読み取り方というのは、さっきもいくつか指摘がありましたけれども、非常にバイアスのかかった読み方をしているように思います。



この資料でも、運動時間、運動する子どもとしない子どもが二極化していくようなところが見られます。「運動時間ゼロ」なんて回答しているのは、やっぱり「活発な運動」というふうに子どもたちが捉えて答えているからだろうと思います。二極化という現象ですね。それは、女子だけではなく、男子にもあります。

このグラフは、先ほどの調査結果の抜粋です。やはりこれを見ると、「自分にとって大切なものである」というところは、男女差はありますが、体育が大事なものだと思っているのです。にもかかわらず、できるようになっていない。あるいは、それが楽しくないという、何か非常にアンビバレ

ンスな心理というか、そういうものを子どもたちが持っている。特に女子は顕著です。最近のように、特に運動というものが栄養とか、休養というか、そういったものと一体になって健康に大事なものだということは、みんな認識しているわけです。健康面だけではないです。気持ち、リラックスさせるとか、自分の楽しみの一つということについてもそうです。ところが、体育の授業の中、学校体育の中で、なかなかそうはなれなかった自分というのが調査結果には表れていると思います。



もう一つは、さっきの価値のところでもご指摘がありましたけれども、必ずしも競争的なものばかりをやりたいわけではない。逆に、競争的でないほかのものであればやってみようという傾向が見てとれます。

そうすると、体育というものは、いったい何をねらいにして、どういう内容を用意することで、本当に男の子も女の子も、すべての人のために意味のある教科になっていくのかというところを考えないといけないのだと思います。

「女性のスポーツ離れ」の不可視化

この資料で言われている女の子のスポーツ離れ、女性のスポーツ離れというのは本当に新しい指摘です。ただ、これを見ますと同様の傾向はもろろん以前からありました。日本スポーツとジェンダー学会などでも、データを示して主張してきたのですが、一般的には「女の子は嫌いになって当たり前でしょう」という感覚があったのではないかと思います。ほとんど問題にされてきませんでした。「女性のスポーツ離れ」の不可視化」としてはいますが、男性はスポーツが得意で好きで当たり前、あえて問題にしても仕方がないのではないかという、そういう考え方、認識が支配的だったという感じがします。

これは結局、教育の中でも、先ほど「親の期待」とかというようなことも指摘されていましたが、学校教育だけではなく、地域や家庭の中でも、小さいころからお稽古事とか、習い事の男女差があります。これは、データでははっきり見えています。つまり、社会全体のジェンダー構造がつくり出している部分があります。その具体的なものをあげながら指摘してきたのですが、小学校から中学校、中学校から高校にかけて進んでいきます。

運動部活動を考えてみましょう。中学1年生というのは、男の子も女の子も「中学校に入ったら運動部に入ろう」と、みんな張り切って入部します。入部率を見ていると女子もかなり高いです。ところが、次の段階の高校になると急に下がってきます。男子も離れますが、男女差が非常に広がってきます。この現象を「女性のスポーツ離れ」と言ってきたのですが、ほとんど問題にされてこなかったのです。

こういう現象を呼び起こす原因が、スポーツ、あるいは、学校教育の中で体育の男性中心的な考え方、構造というものにあるかと思えます。それが、子どもの遊びでも、体力テストでも、「女性は低いから仕方がないよね」というふうな、納得させられてきたという側面があるのではないのでしょうか。

「女性のスポーツ離れ」現象が可視化される・されたポリシー

それがどうして最近になって可視化されてくるのか。なぜ今になって取り上げるのが不可思議なところですね。社会全体が、あるいは体育、スポーツの世界がジェンダーセンシティブになったということではないでしょう。

その問題として一つ、私の読みですけれども、一つは体力向上の評価、これを数量化、序列化するというのを国も地方自治体もどんどんやっています。体力というのは序列や競争ではないといいながら、文部科学省も各都道府県、それから教育委員会も、全国の平均に比べて、例えば大阪府は上とか下とか。同じ大阪府、京都府、大阪市、京都市、そのなかでも場合によっては順位を公表したりしています。東京も活発です。学力テストと同じように、序列化して見えるかたちにし、低いところには「何とか上げなさい」というプレッシャーをかけている訳ですね。

今はすべて評価社会というか、PDCAサイクルとかとよく言われますけれども、体力というのは、もともと他との競争に意味がある訳ではありませんし、測定している体力自体がどんな価値を表しているのか、どんな意味を持っているのかということをよく考えないといけないのです。序列化は男女ともに行われていますから、そのなかで、半分を占める女性の存在を無視できないという状況がある、つまり半分の女性の体力もあげないと全体が向上しないという動きになっていると推測しています。

もう一つは、文部科学省とは別に、厚生労働省の方が、高齢社会、あるいは超高齢化社会への危機感を募らせているなかで、女性の健康がクローズアップされるようになってきました。「長生きする女性が健康でなくっちゃ。その基本要素の一つは運動だよ」という認識の変化でしょうか。こんな言い方はあまり良くないかもしれませんが、女性は元気に、家族の介護をして「ピンピンコロリ」みたいな、そんなことが期待されているのかなと感じるところもあります。うがった見方かもしれませんが、女性の健康問題は、潜在的には深刻な社会的問題と捉えられていると感じています。

調査は継続しているが…「より強くよりスポーツ好き」に焦点

今見ている調査は平成25年度のもので、調査は毎年実施されていますが、毎年観点が変わっています。文部科学省のサイトに全部公表されていますので見ていただけるのですが、なぜ平成26年、平成27年のものを示さなかったかと言いますと、もうこのあたりはちょっと見るに堪えない感じがします。つまり、焦点の当て方が、体力の高い学校とか子どもはどんなことをしているか、という分析をしているわけです。それは違うだろうと思います。つまり、運動とかスポーツというものが、みんなのもの、誰にとってももの権利であるというふうに捉えていくと、そうではなくて、むしろ下方にある子どもたちに視点を当てていくというのが重要ではないかと思うのですが、そうはなっていないのです。

揚げ句の果てに、と言うとちょっとひどい言い方ですけども、質問中の「どういうことがあれば、もっと運動するか」というのに、「有名選手に指導してもらえれば」とか、そういう回答項目が滑り込ませてあるわけです。実際に、子どもの体力問題の取組を見ていると、オリンピックのかつての、あるいは現役選手が指導に来てくれるから集まろうというイベントが多いです。そこに集まるのは、どういう子どもたちだろうということです。

注意が必要なのは、オリパラ教育です。オリンピック・パラリンピックに関する教育については、調査の中にすでに入っています。並行して、スポーツ庁は「オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議」を設置して、最終報告を2016年に公表するなど強力に進めました。新学習指導要領では、「体育科改訂の趣旨」として、「オリンピック・パラリンピックに関する指導の充実については、児童の発達の段階に応じて、ルールやマナーを遵守することの大切さをはじめ、スポーツの意義や価値等に触れることができるよう指導等の在り方について改善を図る。」(小学校学習指導要領解説)としています。中学校では、「スポーツの意義や価値等の理解につながるよう、内容等について改善を図る。特に、東京オリンピック・パラリンピック競技大会がもたらす成果を次世代に引き継いでいく観点か

ら、知識に関する領域において、オリンピック・パラリンピックの意義や価値等の内容等について改善を図る」となっています。内容や趣旨については、別途検討が必要だと考えています。

基本的に、なぜ一つのスポートイベントを教育の中に持ち込むかという疑問があります。女性を活用したり利用する今の「女性活躍社会」と何か似たようなムードを感じるところです。女性であっても、男性であっても、メダルを取れるのであれば、体力の競争順位が上がるのであれば、やろうという方向性が強まった感じがします。どうも、ジェンダーとは異なる背景といいますか、もっと政治的な思惑みたいなものがその背後に働いているような気がしています。

私の経験したよい授業・嫌な授業

視点を変えて、カリキュラムの具体的内容を考えましょう。「私の経験したよい授業・嫌な授業」。ちょっとこれ表現が対応していませんね、すみません。「好きな授業・嫌いな授業」「よかった授業・もう受けたくない授業」、そういう聞き方をしています。いつも大学の授業で学生たちに聞きます。「あなたの学校時代の体育の授業を思い出して、『よかったな、好き』だと思える授業、『つまらない、嫌だ』と思う授業を思い浮かべて具体的に記述してください」という質問をします。そうしますと、毎回の学生の答えは本当に似ています。よかったな、こういう授業は好きだな、また受けたいなというのは、「主体性を尊重してくれる」「工夫がある」「みんながうまくなる」「個に対応している」「達成感がある」「仲間との一体感がある」「新鮮な内容」「選択できた」「競争とは異なる意味がある」です。

逆に、つまらない、嫌な授業は、「罰がある」「先生がよく怒る」「説教が長い」、それから「一方的教え込み」、逆に「放任」、ほったらかしでソフトボールやってこいっていう、そういうタイプです。それから、「基本練習ばかり」「集団行動の強調」「恥ずかしい目にあった」「他と比較される」「記録だけが評価される」、それから「怖い」とか「痛い」とか「寒い」とか「暑い」とか、これもだいたい嫌いな原因です。

「基本練習ばかり」というのは、実は今の学習指導要領では中学校3年生から選択制というのが入ってきています、高校も含めて選択制を中心に展開していく。ところが、かなりの学校がその選択制を積極的には入れていないようです。学生たちの言い分を聞くと、やっと高校に入って選択制になってゲームをいっぱいできる、楽しいゲームができると楽しみに来たのに、「基本は大事」と言われて、たとえば10時間の球技の単元で、半分ぐらいはパスの練習などの繰り返しだったというわけです。

大学生の経験した授業

よかった・好きな授業

- 主体性尊重
- 工夫がある
- みんながうまくなる
- 個に対応
- 達成感がある
- 仲間との一体感
- 新鮮な内容
- 選択できた
- 競争とは異なる意味

つまらない・嫌な授業

- 罰がある
- よく怒る・説教が長い
- 一方的教え込み
- 放任
- 基本練習ばかり
- 集団行動の強調
- 恥ずかしい目にあった
- 他と比較
- 記録だけが評価される
- 怖い・痛い・寒い

* 頻出種目はマラソン、表現・ダンス、器械運動、水泳
* 技能の高い人は不快経験が少ない

ですから、コンセプトとしては、もっと楽しんで何か好きな種目を選んで展開するというカリキュラムの趣旨になっているにもかかわらず、現実にはそうはなっていないということです。集団行動自体は、まだ学習指導要領の中に残っていますが、必要以上にこれをやっているというところも見受けられます。例えば、高校1年生で1学期、7月はほとんどないとして、4、5、6月の3カ月間の半分は体力づくりで、半分は集団行動をやっていたという学校がいまだに残っているのです。

傾向を見ていると、学生がよく挙げる種目は、マラソン。マラソンというのは長距離を走る、持久走です。それから、いい面も悪い面でも、表現・ダンス、器械運動、水泳がよく出てきます。技能の高い人というのは不快経験が少ないような傾向があります。

体育科教育とジェンダー・ポリティクス

そのなかで、こういう訴えがあります。これは、私のところではなくて、ほかの研究者が示された内容ですが、大学に入ったばかりの女子学生の訴えです。これは非常に切実な経験を物語っているので紹介させていただきます。

私は体育が大嫌いです。運動神経が鈍くて何をやらされても目をおおいたくなるほどヘタだからです。高校のときはいつも体育の成績は「2」でした。「1」をつけられなかったのは、ちゃんと出席してまじめだったからという先生のお情けのおかげだと思っています。ほんとうに私にとって体育ほどいやで悲しくて恐ろしい時間はありませんでした。……みんなは、マラソンなんかはきらいけれど、そしてそれは確かに苦しいものだけれど、私は好きでした。なぜなら、それで時間がつぶれるから……（大学生となった今）一般教育で体育をとっていますが、とてもつらいのです。テニスをやっていますが、もちろん私が一番ヘタです。……2学期からは実際の試合形式で授業が進むのだと思うと恐ろしくて足がすくむのを覚えます。

こういう訴えです。私はこれを利用してもらってお話をするのですが、「それは、私です」と言われる参加者がよくいらっしやいます。学生のなかにも同じような訴えをする人がいます。教員養成大学は体育が必修になっているので、「大学になって、やっと体育から離れると思ったら、教養科目で必修だった」と嘆いています。女子の中に少なからずこういう経験をしてくている人がいるのです。男子も潜在しています。

特に、できないことの辛さには耳を傾ける必要がありますね。できない

というのは、この学生さんの場合は「運動神経が鈍い」という表現ですが、運動、スポーツの技能というのは、小さいころから経験によって身につく神経系のものですから、やらないと誰もうまくならないわけです。例えばボール投げでも、両方投げられる人もあると思いますけれども、明らかに差があります。それは、やっぱり右手だったら右手で投げるということを何度も何度も繰り返すなかでうまく投げられるようになっていく。それが、小さいころからそういう経験が乏しかった人は、うまくならない。それをカバーしていくのが体育の役割なのですが、現実には差がどんどん開いているということなんだろうと思います。

私の担当する授業に、「体育・スポーツ指導者論」という授業があって、ジェンダーや女性の視点から数時間を担当しています。「女性の体育、スポーツ指導者は少ないよね。どうやったら増えるでしょうね」と投げかけますと、ある男子学生はこういう回答をしました。そのまま紹介しますと「私は、女性のスポーツ指導者が少ない理由に、男性と比べると運動能力に劣る種目が多いことが挙げられる。指導者の見せる見本が大切で、それによって生徒は感動し、自分もできるようになりたいという学びの姿勢になっていくように思う。その点で、男性の指導者の能力に比べると、女性の指導者の見本というのは感動させるには至らないのではないか。そもそもできないことを指導することは無理なのである」と、ここまで言うわけです。ですから、どれだけ体育において「できること」とか、よりうまい人が下手な人に教え込むということが、こういう大学生も含めて、これは指導者になろうとする人なのですが、そういうなかに浸透しているかということです。情けないけれども、これが実態です。他の学生も、結構これに近い本音を書いてきます。

これは、私の実践の紹介です。「大学に入って、また体育か」という学生の嘆きを、私は見ていられない気持ちになります。体育についての私のポリシーは上手さや技能からかなり離れていますので、こういうことをやっています。1回生は「生涯スポーツ実習」という必修授業があり、選択でコースを選びます。選択肢に「フィットネス」というコースを設定していますが、これを選んで来るのは圧倒的に女子学生です。他のコー

スは球技などが中心で、「フィットネス」に来る学生は「球技は苦手」という人が多いです。もちろん、なかには「フィットネス」に関心を持ってくる人もいます。

この授業のポリシーは「人と比べない」「うまく運動しようと思わない」「無理せず自分のペースを守る」「自分の体と対話しよう」です。人のことなんか見なくていいです。鏡があるんですけども、鏡が恥ずかしい場合は、鏡に背中を向けてやったりもします。「自分だけ、見とき」と、そういう授業です。そうすると、参加者の顔が上がってくる。それから、表情に安堵感といいますか、「あ、それだったらできそう」という反応が返ってきます。

そういう学生を見ていて思うのは、高校まで12年間、それだけの時間、学校にそれに見合う施設や指導者という非常に大きな資源をつぎ込みながら、体育授業がその学生たちに（女性だけではありません）、苦痛とか苦手意識しか与えられていなかったということが非常に残念、それが現実だということです。その原因の一つとして、やっぱり競争、人と比較すること、序列化すること、それから、うまくなるという技能への価値意識が非常に強いという、この辺りが一つの原因かなと私は見ています。

体育カリキュラムの罫

少し歴史に戻ります。では、体育カリキュラムというのは、いったい何なのだろうかということです。最初に触れましたが、戦争中の体育、というよりも体錬ですね、ああいったものは論外ですけども、戦後、これに代わる民主的な教育手段として、スポーツを中心に置いたカリキュラムに変化をしました。スポーツには、西洋生まれというだけでなく、プレイを楽しむ、民主的に同じルールでみんなが競争するというところに一つの希望があったわけです。

しかし、ジェンダー視点から考えますと、1989年の学習指導要領までは、男女でカリキュラムが異なっていました。時代によって格技とか、武

道とか呼び方が変化しますがけれども、男子は主として武道（格技）、女子は主としてダンス（表現）。そのうえ、単位数も差がありました。高校では、男子が体育をやっているうちの2時間分、単位としては4単位、3年間のうちの2年間だと思いますが、女子は家庭科をしているというのが通常、当たり前、そういう時代です。それが、1989年には家庭科が男女とも必修になりました。

それから、現在も実態は男女で異なるカリキュラムが継続しています。どんなカリキュラム、どんな種目を学習したかというところを調べてみると、明らかに違います。武道とダンスには差がありますし、球技でも、たとえばサッカー、バスケット。サッカーは圧倒的に男子です。なぜか、バレーボールとなると女子になります。教師の数も男女比にも差があります。指導者ということですね。運動部活動も違います。小さな学校では、男子用にはサッカーがあるけど、女子用のクラブとしてバレーボールしかないとか、そういう差異もあります。ルールもスペースも違います。それから、男女二元制、つまり男女別ということです、こういうものが今も続いています。

近代スポーツ

そもそも体育カリキュラムの中心になっているスポーツとはどういうものかということを考えてみますと、近代スポーツが中心になっています。近代スポーツというのは、競技化、記録化、組織化、ルール化、専門化という特徴があり、これは男性の教育手段として生まれて発展してきたという歴史があります。

基本的にそういう性質があるわけですから、近代スポーツそのものが、男性が有利になるような内容になっています。体格の大きさであるとか、筋力であるとか、そういうものが圧倒的な強みになっているもの、それが近代スポーツです。それが体育カリキュラムの中心にあるということなのです。

一方で、多くの近代スポーツでは脂肪は「お荷物」、いらぬ物ということになります。唯一、脂肪が付いてもいいのは、何でしょうか。競技スポー

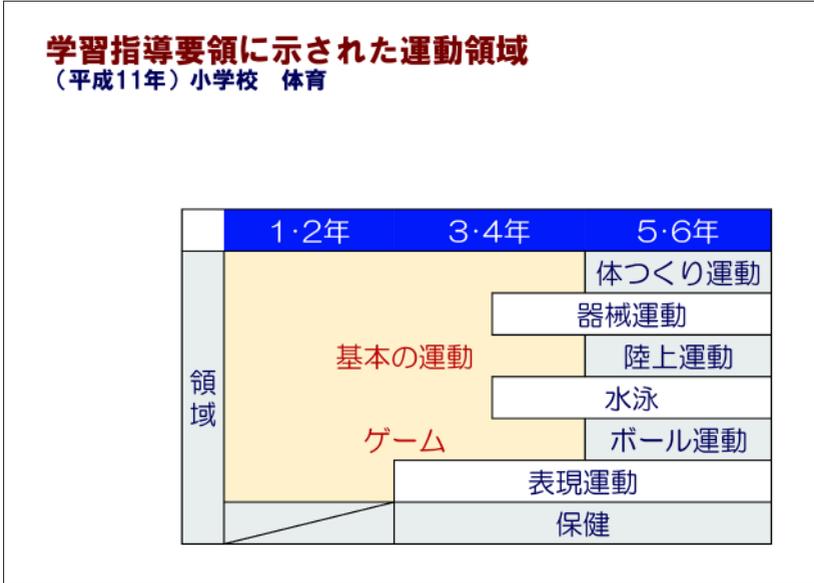
ツで脂肪が付くことを奨励されるのは。脂肪って軽いですよ……。シンクロナイズドスイミングですね。逆に、脂肪が荷物になって困るような長距離走、陸上競技なんかは、とことんそぎ落としていきますから、それがきっかけになって摂食障害であるとか、骨密度がどんどん落ちてくるというような。女性アスリートのトライアド (triad、三主徴) と呼ばれる現象も起きています。

こういうものが、体育カリキュラムの中心になっていることに疑問を持つことが重要ではないかと考えています。

2008年学習指導要領の改訂

2008年(平成20年)の学習指導要領の改訂では、以下の三つが体育の中では大きな変更点でした。武道とダンスの必修化、これは男女ともということです。それから、スポーツ中心の系統性の強化ですね。加えて、体づくり運動の強化です。武道については、言うまでもなく伝統文化の尊重というか、それに連動して出てきたものなので、あまり説明もいらないかと思えます。こういった、何が必修になっていくかということは大きな意味で政治的です。カリキュラムの改訂の度に、いろいろなスポーツ団体が自分たちのスポーツを必修にしてほしいという要請を繰り返しています。要請する組織には武道議員連盟というのもあり、そういう政治も働いているということですね。

次に、スポーツ中心になっていったということについて、簡単に説明しましょう。これは小学校の運動領域です。種目とを考えていただいたらいいのですが、どういう運動を小学校の体育授業で取り上げるかが小学校の1年生から6年生まで示されています。これは現行の一つ前の学習指導要領で示された内容です。1・2年生、3・4年生は、基本の運動、ゲームという小さくくりでした。基本的に、ここにはあまり個々のスポーツの要素は入っていませんでした。



ところが、現行のものでどうなったかと言いますと、このように横の流れを見ていただくとわかるのですが、スポーツへとつながる系統を大事にするように変わりました。1・2年生は「運動遊び」などという内容が示されていて、スポーツから遠いことがわかるのですが、高学年になると陸上運動とか、水泳とか、ボール運動というスポーツにつながっていきます。ここで、どんなことが起きるかと言いますと、例えば水泳などがわかりやすいのですが、1・2年生では「水遊び」となっています。これは泳ぎを身につけるためにしっかりやらないといけません。スイミングスクールに通っていて泳げる子というのは、「水遊び」をしなくても泳げます。一方で、顔をつけるのも怖い子どもたちがいます。ところが、それをやらないで、すぐバタ足の練習とか、水泳の基本をやらうとすると、もうそこで離脱してしまうということが起こってきます。学校体育はその差を埋めていけないといけませんのですけれども、なかなか埋まらない、どこか差異が拡大するということです。

小学校体育運動領域（現行学習指導要領）

学年	1・2	3・4	5・6
領域	体づくり運動		
	器械・器具を使っ ての運動遊び	器械運動	
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
	水遊び	浮く・泳ぐ運動	水泳
	ゲーム		ボール運動
	表現リズム遊び	表現運動	
	保健		

*体づくり運動は小学校1年生から配置
 「水遊び→浮く・泳ぐ運動→水泳」など、スポーツ中心の系統性が重視
 *5・6年生の到達目標：クロールと平泳ぎ、25-50m泳げる
 ⇒「走る・跳ぶ」はスポーツ競技の準備、導入段階？

どの運動領域も同じことが言えます。陸上運動もそうです。1・2年生の「走・跳の運動遊び」は、まっすぐ走らなくても、ジグザグでもいいし、いろいろな走り方で、跳んだり走ったり、楽しい、走る、跳ぶという運動をいろいろと経験しながら動きを身につけていきます。しかし、走る、跳ぶというと、すぐにミニハードルという低いハードルを置いて跳ばせようとか、スタートダッシュを練習するとか、低学年の体育授業であってもスポーツの特性を先取りした内容になっていってしまうという傾向が見てとれます。

これが新学習指導要領です。改訂されましたが、実施されるのはもう少し先です。現行のものを概ね引き継いでいるのですが、低学年は「水遊び」で同じですが、中学年は「浮く・泳ぐ運動」だったものが「水泳運動」に変化しています。きっと3年生からしっかりバタ足ということになるのだろうなと思っています。

小学校体育 運動領域（新学習指導要領）

H28改定、30-31移行期間、H32完全実施

学年	1・2	3・4	5・6
領域	体づくりの運動遊び	体づくり運動	
	器械・器具を使っての運動遊び	器械運動	
	走・跳の運動遊び	走・跳の運動	陸上運動
	水遊び	水泳運動	
	ゲーム		ボール運動
	表現リズム遊び	表現運動	

オリンピック・パラリンピックに関する指導（スポーツの価値、フェアプレイなど）
集団行動、自然との関わり合いの深い活動

海外の事例

アメリカのナショナルスタンダード

海外の事例

アメリカのナショナルスタンダード

National PE Standards

SHAPE America's National Standards & Grade-Level Outcomes for K-12 Physical Education define what a student should know and be able to do as result of a highly effective physical education program. States and local school districts across the country use the National Standards to develop or revise existing standards, frameworks and curricula.

- **Standard 1: The physically literate individual** demonstrates competency in a variety of motor skills and movement patterns.
- **Standard 2: The physically literate individual** applies knowledge of concepts, principles, strategies and tactics related to movement and performance.
- **Standard 3: The physically literate individual** demonstrates the knowledge and skills to achieve and maintain a health-enhancing level of physical activity and fitness.
- **Standard 4: The physically literate individual** exhibits responsible personal and social behavior that respects self and others.
- **Standard 5: The physically literate individual** recognizes the value of physical activity for health, enjoyment, challenge, self-expression and/or social interaction.

これはアメリカのナショナルスタンダードです。アメリカのものを批判的に見ることもできますが、ここでは日本と対比的に見たいと思います。5つのスタンダードがありますが、注目していただきたいところは、「physically literate individual」、つまりスポーツができるとかそんなことではなくて、「からだの教養」「からだのリテラシー」のある人と訳しています。「からだの教養がある」というのはこういうことだと5つのスタンダードで示しているのです。

こんなスポーツをやりましょうとか、あんなスポーツを絶対にやらないといけなといった細かい規定はなく、そういったことは、学校あるいは教員に任されています。北米、アメリカ、カナダは教育が地方分権なので、こういったスタンダードで大きくりの基準だけ提示し、目指すべき山は示すけれども、どんなルートで行ってもいいよという、そういうつくりになっています。

注目したいのは、体育が目指すのは、「physically literate individual」、「からだの教養」を備えているということだと言っている。スポーツができるとは言っていないということです。

『子どもが見た世界の体育授業』からの問いかけ

少し似たもので補足します。『子どもが見た世界の体育授業』という本が、かなり前に出ています。東京にある国際基督教大学高校（ICUHS）の先生がまとめられたものです。この高校は海外から帰国した生徒たちを受け入れています。その生徒たちが海外で経験した体育授業と日本で受けた体育の授業との違いについてレポートしています。印象的なレポートの一つが、「日本では、どうして二重跳びや逆上がりができることが体育の絶対的な条件になるのだろうか？」という素朴な問いかけです。海外で二重跳びとか逆上がりができるのが必須条件なんてあまり聞いたことがないです。日本の場合は、これらと25メートル泳げることかな、その三つがクリアできないと、子どもたちは相当苦しむという状況があります。この「できる」というのは、いったい何？ 何のためにこれをやるのかということなので

す。無意味だとは言いませんが、これができないがために苦しんでいる、体育嫌いになっていくという現実と、これを重んじる文化をどう考えていくかということでしょう。

他の例では、服を着たままの水泳授業、着衣泳です。今でこそ、日本でも着衣泳をやるようになりました。でも、このレポートは1990年、むしろその前です。海外では、水泳では真っ先に着衣泳、つまり命を守るということをやっているのです。つまり、体育の授業の中で、まず身に付けさせることは何か。さっき言ったからだの教養、動きのリテラシーって何なのかということに通じる部分だと思います。

スポーツ中心カリキュラムへの懸念

今まで申し上げてきたことを、ざっと箇条書きにしています。スポーツ中心のカリキュラムが過剰になると、体育カリキュラムを矮小化するとか、ゆがめてしまうように思います。からだと動きに関わる多様な学びがあるはずなんだけれども、スポーツ、なかでも近代スポーツに集約されていくような傾向への懸念です。もっと生きるための、というか、生涯にわたって役立つ運動を中心に置くことで、違ってくるでしょう。例えば、命のために浮き続ける、浮いていられるということ。スポーツ種目でも、長浮き競争なんていうようなものを想定されもしない。より速く、より遠くとか、より力強くということは競われる社会で、浮き続けるなどといったことが競争にはされてこなかった。する必要もありませんが。

競争原理を強化していく、「結果がすべて」「競争は社会発展に不可欠であり、避けられないもの」という言説を、何か体育とかスポーツという文化が補強しているという部分があるのではないかと感じています。

からだの教養

からだの教養ということについて、ちょっとわかりにくいと思ったので、他の例を出しています。丘沢静也さんが書かれた『からだの教養』という

本ですが、本当にいい本だと思っています。読まれたことがある人、いらっ
しゃいますか。丘沢静也さんってご存じでしょうか。この人はドイツ文学
者で、ミヒャエル・エンデやカフカなどの翻訳で知られています。エンデ
というと『モモ』とか『はてしない物語』など子ども向けの文学が知られ
ています。これらの文学の背景には社会が何に価値を置いているかを問
直すような姿勢が流れているように思います。この方、実は運動が好きで、
トライアスロンみたいなこともやっていたらっしゃるのですが、競争的な価
値観とは対照的で、こういうことを言っておられます。

自分の体調や能力と相談しながら気楽に走る。のんびり泳ぐ。誰かに強制され
たり、誰かと競争するわけではない。もちろん、競争しようにも、そんな能力も
ないのだが。トップレベルの約半分のスピードが、今の僕にはちょうどいい。「レ
ニングラード特急」とか、「泳ぐコンピューター」と呼ばれる1500メートル自由形
の王者サルニコフは50メートルを30秒で泳ぐが、僕は60秒。マラソンのトップラ
ンナーは1キロを3分のペースで走るが僕は5分。これは、競技スポーツと違って、
100分の1秒を争ったり、けがを覚悟で勝者に執着するものではない。無理をせず、
身の程をわきまえたフィットネススポーツなのだ。より速く、より高く、より多く、
飽くことを知らず能力の限界に挑むファウスト的な競技スポーツとは対照的なス
タイル。

ということで、運動との関わり方、自分との対話のような部分も運動、
これをスポーツと言うかどうか別にして、広い意味でのスポーツの中に見
いだしておられるということです。

さらにもう一つ。これは教育学者の佐藤学さんの著書で、『学びの身体
技法』というのがあります。これは全体としては体育のことを言っておら
れるわけではないのですが、体育について語られた部分が印象的です。こ
の方は、小さい頃に家族の仕事の関係か何かで漁村で育ったというか、大
きくなられたようなんです。だから、水泳は海に飛び込んだりなど得意だ
った。佐藤さんは、泳ぎというのは時代とともに形式が変わってきていると
指摘されています。前近代の水泳というのは、顔を水につけなかった。顔

をつけるということは特に目を守るという観点から危険だった。今は、顔をつけなくて泳ぐのは下手くその泳ぎとか、競技でいえばありえない泳ぎになるわけです。そういう泳ぎ、身体文化というのは歴史とともに変わってくることをまず提示されています。

佐藤さんは、漁師町で育って、泳ぎはどんな波が来ても大丈夫ぐらいの自信があったらしいのですが、その後都会に転校されて、プールでみんなと一緒に競泳をすると、記録は全然よくなかったというんですね。幸運なことに、良い体育の指導者と出会って、「君は泳ぐ技術はそれだけ身につけているんだから、ここをちょっと工夫したら、タイムが速くなるよ」と教えてもらったようです。結果的に、競泳も得意になったという話です。それだけ、泳ぐということ一つを取っても、何に価値を置くかということでもずいぶん変わってくる。

この佐藤さんがもう一つ印象的なことを言われています。運動、スポーツ、体育だけではなくて、音楽についてのことで、これが非常にわかりやすいなと思います。ブラスバンドとか、合唱部というのは体育会系と言われるぐらい、コンクールの上位入賞をするのを目標にやっている学校は多いです。

佐藤さんが例に出されているのは、ある学校でブラスバンドだったか、そこには本当に音楽が得意な子どもたちが全部集まって、コンクールの上位を目指して頑張っている。一方で、少人数の合唱部というのがあった。そこに参加している子どもたちは、音楽は好きなんだけれども、そんなに得意とか、コンクールでがんがんやっていくようなそんな気もない。どちらかといえば小さくなってやっていた。あるとき、何かやりたいよねというので、ボランティアで老人施設とかいうか、そういうところで歌と一緒に歌いましょうというので出掛けていく。そうすると、自分たちはそんなに自信もなかったけれども、一緒に歌ってお年寄りたちがみんな喜んでくれた。喜んでもらえるということ、あるいは、一緒に歌うということがこんなに楽しいことなんだ、そこに音楽の価値を見いだしたというわけです。

つまり、スポーツも一緒に、競技でより高いところを目指すというやり方もあるけれども、そのものを楽しんでいくということに価値を置く。

それに自信を持って、この価値、自分が大事にする価値はこれなんだということを言えるような、そういう文化というか、そういう風土というか、そういうものを大切にしたいということです。佐藤さんの文脈とは外れるかもしれませんが、スポーツの価値をどこに置くかという点で大変示唆的です。

学校体育と競争原理：遊びの競技化

ところが、学校体育というのはますます競争原理で運ばれているように感じています。「なわとび」というのを、しばらく調べたことがあるのですが、「なわとび」の競技化です。子どもの素朴な遊びだったなわとびなのですが、一時期パナソニックが、「ロープジャンプ小学生No.1 決定戦」という競技会をやりました。パナソニックはすぐにサッカーの方に移ってしまって、今はNHKが「なわとびかっ飛び王選手権」というのをやっていて、昨日ちょうど放映していました。その予告版があるので、ちょっと見ていただきましょう。

とにかく、小学生の段階まで、こういった対抗的な、競技的なものが増えていきます。駅伝もそうです。小学生まで。京都でいえば大文字駅伝で、多くの学校が熱狂してやっています。今はちょっと鳴りを潜めたのが、30人31脚とか、ありましたね。一時テレビの番組になっていました。

かつては小学生、中学生に関しては、全国大会、全国の競技大会はやらないという文科省からの通知があったのですが、小泉内閣のときの規制緩和で、それを取っ払ってしまって、小・中学生の全国規模の大会はお構いなしの状態です。

NHKがやっている「なわとびかっ飛び王選手権」。このあたりで、いったん切った方がよさそうですので、このビデオだけ見ていただきましょう。

(ビデオ再生)

これはエントリーを呼び掛けるビデオでした。チーム名のなかには、

「絆」とか、そういうのが大変多い印象です。子どもたちを絡め取っていているというか、それが見え見えの感じがしています。皆さんはいろいろな感想を持たれると思いますけれども、私は、こうやって子どもたちが絡め取られていくのかという感じがします。「なわとびかっとなわとび王選手権」は、東京2020、オリパラの公認教育プログラムになっているということです。こういう事態が起こっているのです。

まとめ・課題

もう時間がわずかになってしまいました。もう少し丁寧にお話ししたいところもありました。ポリティクスということばを何度も使ったので、ちゃんと定義しないといけないということもあります。学校外でのいろいろな動きや思惑も重要です。特にサッカーなどの動きも紹介をしたかったですけれども。すみません、私の時間配分が悪くて触れることができません。

体力についても、ちょっと立ち止まって、体力っていったい何かということも考えてもらう必要があります。ここは大阪なのでちらりと言っておきますと、首長が「学力も体力も駄目」みたいなことをランキングを見て言ったという報道がありました。

それから、触れることはできませんでしたが、セクシュアルマイノリティの問題も非常に大事な問題です。今やっと可視化されてきたところですが、これが学校、体育の中でどのように課題として扱われていくかということについては、慎重に見ていく必要があるでしょう。

たくさんスライド資料をつくってきたのに紹介しきれませんでした。後のセッションで、何かご質問等あれば話をさせていただきたいと思います。

以上です。ありがとうございました。